最終レポート

縄文時代から古墳時代の墓制および葬送習俗の概観
― 社会的階層化の顕在化 ―

文芸学部　クリオズ・ティフェーヌ
指導教員　遠藤　耕太郎 教授

1.　はじめに

日本列島における縄文時代から古墳時代に至る葬送習俗の変遷は、日本社会の構造的変化を考察する上で重要な考古学的資料を提供する。縄文時代初期に見られる単純な土葬から、弥生時代の壺棺墓、さらに古墳時代に築造される大規模な墳丘墓に至るまで、これらの墓制は社会の階層化が進行していく過程を如実に物語っている。本レポートでは、各時代の特徴を概観した上で、墓の構造や副葬品について、必要に応じて時期区分を行いながら分析し、社会的階層化の成立と発展を明らかにすることを目的とする。

2.　縄文時代
2.1. 縄文時代の特徴

縄文時代はおよそ紀元前12,000年からおよそ紀元前500年まで続き、5または6期区分論に分けられるが、ここでは詳細には触れない。この時代名は、縄目文様を施した土器に由来する。当時の人々は半定住生活の生活から次第に定住生活へと移行し、狩猟・漁撈・採集を生業とする社会であった。食料資源としては、獣類、魚介類、ドングリやクルミ、クリなどの種実類が利用されていた。住居は竪穴住居であり、地面に直接立てた柱と草葺き屋根を特徴とする。縄文時代は、農耕を伴わずに土器が製作された最初の文化としても知られており、これらの土器は主に食料の貯蔵に用いられていた。

2.2. 縄文時代の墓制

縄文時代初期の墓は、装飾を伴わない単純な土葬であり、遺体は伸展葬または横たわった姿勢の状態で埋葬されていた。

中期縄文（およそ紀元前3000年）になると、住居内埋葬が行われるようになり、居住者の死後、その住居は放棄される例が見られる。場合によっては、複数の遺体が同一の住居内から発見されることもあり、次第に集団埋葬の規模は住居の大きさを超えるようになる。

縄文時代後期の初頭（およそ紀元前2000年）には、関東地方に限って、円形の土塚を頂に持つ集団墓が築かれた。また同時期、特に東北地方では、石棺と呼ばれる新たな埋葬形態が確認される。

副葬品はほとんど見られず、わずかに耳飾りなどの装身具が出土するにとどまる。これらの葬送習俗の変化は、定住化の進展と密接に関係しており、石棺は特定の社会的地位を持つ人物の埋葬であった可能性が指摘されている。

3. 弥生時代

3.1. 弥生時代の特徴

弥生時代は、紀元前500年頃から紀元後300年頃まで続いた時代であり、一般に早期・前期・中期・後期の4期区分論 に区分される。この時代名は、現在の東京都文京区弥生町で発見された、縄文土器よりも簡素な形態の土器に由来する。

弥生時代は、本格的な稲作農耕の導入によって社会構造が大きく変化した時代である。狩猟採集を中心とした「捕食社会」から、農耕による「生産社会」への移行が進んだ。また、金属器の使用も始まり、青銅は祭祀用具や装身具に、鉄は実用的な道具に用いられた。

この時代には、平地建物の出現や墓制の分化が見られ、簡素な埋葬と副葬品を伴う墓とが併存するなど、社会的階層化がより明確になる。

3.2. 弥生時代の墓制

弥生時代早期（紀元前**500**～**300**年）

この期は主に九州北部に限定される。墓制は比較的単純で、遺体は副葬品を伴わずに埋葬され、その上に一枚の石が置かれる形式が一般的である。これらの墓は、縄文時代の埋葬形態と大きな違いは見られない。

弥生時代前期（紀元前**300**～**200**年）

この期になると、九州北部から西日本一帯、さらに畿内地方へと弥生文化が拡大する。板付遺跡（福岡県）では、新たな墓制が確認されており、墓地は集落の近くに位置し、明確な区画は存在しない。成人は土坑墓または石棺に埋葬され、子どもは小型の壺棺に納められるなど、年齢による区別が行われていた。墓からは質素な土器が出土している。

九州北部では、社会的差異が明確でない壺棺墓が多く見られ、弥生中期にその数が増加する（実例は吉野ヶ里遺跡の壺棺墓群）。これは地域的特徴と考えられる。

近畿地方では、故人（多くの場合3～4人）を棺に納め、高さ1メートルの長方形の土塚の下に埋葬し、その周囲を4つの堀で囲む（こうした墓は「法華集骨幢」と呼ばれる）。

弥生時代中期（紀元前**200**～紀元後**100**年）

この時期は、弥生文化が西部一帯で定着した時期である。佐賀県の吉野ヶ里遺跡は、その代表例である。

墓には青銅器や鏡が副葬されるようになり、場合によっては大きな石板で覆われる。墳丘墓を中心として墓群が配置される例も見られる。
埋葬は引き続き壺棺によって行われ、ガラス製装身具、朱顔料、青銅製短剣などが副葬されるようになる。例えば、吉野ヶ里遺跡の1002号壺には、これら3つの要素が見られる。大府南の古

墳でも同様の例が見られ、埋室の内壁は朱顔料で塗られ、鉄製や青銅製の副葬品に加え、ガラス製の腕輪も納められていた。

これらの副葬品や朱の使用は、九州北部を中心に確認され、垂直的な社会階層の形成が進行していたことを示している。墳丘の規模は次第に拡大し、他の墓から独立した配置が目立つようになる。

弥生時代後期・末期（紀元後**100～300**年）

この段階では、墳丘墓はさらに大型化し、1～2名の被葬者と豊富な副葬品（土器、鏡、武器、金属生産に関わる道具、翡翠製の玉類）を伴うようになる。墳丘の形状は方形または長方形が多く、長さ10～20メートル、高さ1～2メートル程度で、円形のものも存在する。これらの大型墳丘は、次の古墳時代へと連続的につながっていく。

また、弥生時代には、特定の高位者に限定された葬送儀礼である「殯（もがり）」が登場する。これは約10日間、肉食を断ち、喪主が儀礼的な泣き声を発し、他の人々が歌や舞、酒を伴って哀悼を示す儀礼である。

この時期、社会的不平等は顕著となり、弥生時代から古墳時代への移行期に最高潮に達する。大規模で副葬品の豊富な墓は、被葬者が大きな権力と動員力を有していたことを示している。

4. 古墳時代

4.1. 古墳時代の特徴

古墳時代は3世紀中頃に始まり、6世紀頃まで続く。この時代を特徴づけるのは、大規模な古墳という墳丘墓の築造である。古墳は畿内地方を中心に成立し、約1世紀の間に沖縄と北海道を除く日本列島全体へと広がった。

この時期には、より広域的な政治権力の形成が進み、鉄製農具による開墾や農業生産の拡大が見られる。また、副葬品に武器が多く含まれることから、社会の軍事化も進行していたことがうかがえる。

4.2. 古墳時代の墓制

古墳は、高位者の標準的な墓制として確立された。多段構造の墳丘を持ち、大型のものでは周囲に濠が巡らされ、水利システムの一部を構成する。通常、棺は1つだけ入っているが、ごくまれに2つ入っていることもある。

副葬品には、鏡、翡翠の装身具、農具、甲冑、武器などが含まれる。ごくまれに、故人の名前が記された「ボシ」と呼ばれる板が墓の中から発見されることがある。これらの墓は当初、埴輪（円筒形の陶器）で覆われており、その上に葬祭用の壺が置かれている。この時代の終わり頃、埴輪は人間や動物を表現するようになった。

古墳には、前述の「墳丘墓」のようにいくつかの形態があるが、最もよく知られているのはやはり「前方後円墳」という古墳である。ここではこの前方後円墳について述べる。
前方後円墳は一部のもの（大阪府の大仙陵古墳は長さ525メートル、高さ40メートル）が極めて巨大であったため、膨大な数の労働者を動員できる社会体制が必要だったことから、エリート層

のみが築くことができた。実際、古墳はそこに埋葬される人物が亡くなる前に築かれたとされ、仁徳天皇も自身の古墳の場所を自ら選定したと伝えられている。

古墳時代前期（約**250～350**年）

墳丘は2～4段の多段構造の墳丘を持ち、墓は円形の後部の中央に位置し、古弥生時代と同様、底が赤い石積みの墓穴に設けられている。埋葬は、「割竹」式の木棺、あるいは「箱」形の石棺で行われる。

古墳の規模は平均して全長150～200メートル、高さ10～15メートルであるが、後半には300メートルを超えるものも出現する。副葬品としては、中国系の20センチ鏡が大量に出土する。

古墳時代中期（**400～500**年）

この時期には、全長400メートル級の前方後円墳が築造されるが、その数は限られている。棺は箱式石棺に統一され、濠はより広く、体系的に整備される。副葬品は鏡から武器・甲冑へと変化した。

古墳時代後期（**500～600**年）

前方後円墳の規模は縮小し、全長120メートルを超えるものは少なくなる。埴輪は引き続き用いられるが、設置は次第に限定的となり、金属製副葬品は減少し、土器が中心となる。

古墳時代終末期（**600～700**年）

前方後円墳の築造は停止し、埴輪も姿を消す。これは国家形成の進展と密接に関係していると考えられる。

5. おわりに

縄文時代から古墳時代に至る墓制および葬送習俗の変遷を概観することで、日本社会における社会構造の変化が明確となった。縄文時代には、簡素な土坑墓が中心であり、社会的差異はほとんど認められない。弥生時代に入ると、農耕の定着とともに墓制に明確な差異が生じ、社会的階層化が進行する。古墳時代には、巨大な前方後円墳の築造が可能となるほどの権力者が出現し、垂直的な社会構造が確立されたことが、墓制を通じて読み取れる。これらの墳丘墓は、現在に至るまで日本の景観に強い痕跡を残し、古代社会の権力構造を象徴する存在である。

参考文献

BAUER Estelle, 2023, Histoire du Japon [notes de cours], INALCO

DEMOULE Jean-Paul, SOUYRI Pierre-François, 2008, Archéologie et patrimoine au Japon, Editions de la Maison des sciences de l’homme, Paris, 146 p.

KAWASHIMA Takamune, 2011, “Burial practices and social complexity : Jomon examples”, Documenta Praehistoric, vol. 38, p. 109-118

MACÉ François, 1997, La mort et les funérailles dans le Japon ancien, POF, 659 p.

NESPOULOUS Laurent, 2007, Une histoire de la protohistoire japonaise. De la genèse de l'agriculture à la formation des sociétés archaïques complexes, du Vème millénaire avant notre ère au Vème siècle de notre ère, Paris, INALCO

NESPOULOUS Laurent, SOUYRI Pierre-François, 2023, Le Japon – Des chasseurs-cueilleurs à Heian, Belin, 538 p.

NESPOULOUS Laurent, 2024, Archéologie au Japon [note de cours], INALCO

Yoshinogari Historical Park, "Rows of Burial Jars", https://www.yoshinogari.jp/en/introduction/restore/kamekanboretsu/